

最終講義抄録



信州大学での歩み 40年を振り返って
—進而不止—

大橋 俊夫
信州大学医学部器官制御生理学講座

大橋俊夫 教授 略歴

昭和24年3月27日生まれ

[資格]

ECFMG合格 211-979-0 (1974.1.23)
医師免許 223123 (1974.6.17)
産業医 0302591 (2004年)
人間ドック認定医 A-7825 (2013年)

[履歴]

1974年4月 信州大学医学部助手 (第一生理学教室：主任 東 健彦教授)
1977年8月 信州大学医学部講師
1979年7月 英国ベルファストクイーンズ大学医学部講師 (1981年2月迄)
(主任：Ian C. Roddie 教授)
1980年10月 信州大学医学部助教授 (兼任)
1983年1～2月, 1985年1～2月, 1987年4～5月
米国 NIH 研究所 NIMH 客員研究員 (臨床科学部門)
1985年1月 信州大学医学部教授 (第一生理)
1995年5月～1997年5月, 1999年5月～2001年5月
信州大学医学部附属動物実験施設長
2000年4月 信州大学大学院医学研究科教授 (臓器発生制御医学講座)
信州大学医学部教授 (第一生理) (兼任)
2000年7月 株式会社スキノス取締役 (研究成果活用兼業)
2001年4月 信州大学評議員
日本学術会議生理学連絡委員会委員
2003年4月 科学技術振興機構大学発ベンチャー創出事業評価委員会
ライフサイエンス部門プログラムオフィサー (2013年9月迄)
2003年6月 信州大学医学部長, 信州大学大学院医学研究科長 (2008年6月迄)
2005年4月 信州大学学長補佐 (兼任) (2013年9月迄)
2005年5月 文部科学省
「医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」委員 (2007年3月迄)
2006年5月 全国医学部長病院長会議会長 (2008年5月迄)
2006年12月 厚生労働省, 医道審議会医師分科会委員 (医師臨床研修部会) (2008年5月迄)
2009年4月 信州医学振興財団副理事長
2013年4月 信州大学医学部メディカル・ヘルスイノベーション講座 (寄附講座) 教授
(兼任) 現在に至る

[学会]

日本リンパ学会 (理事長) (2001年6月～)
日本発汗学会 (名誉理事長) (2013年8月～)
日本脈管学会 (副理事長) (2003年10月～)
日本微小循環学会 (理事) (1989年2月～)
第48回 日本脈管学会 会頭 (松本, 2007年10月)
第89回 日本生理学会 大会長 (松本, 2012年3月)

信州大学での歩み 40年を振り返って —進而不止—

大橋 俊夫

信州大学医学部器官制御生理学講座

私は昭和49年3月信州大学医学部を卒業して、ただちに東 健彦教授が主宰されていた医学部第一生理学教室に助手として採用され、イギリスのベルファストクイーンズ大学、アメリカのNIH研究所への留学を除けば、すべて信州大学医学部に奉職しておりましたので、ほぼ40年近くこの松本の地で生理学の教育・研究を行ってきたこととなります。この40年の活動を振り返って、医学教育・医科学研究・医学部の管理運営などについて、自己の中に醸成された思いについて述べさせていただき、今後、本邦のみならず世界の医学・医療を担う皆様の一助にでもしていただければと存じます。

私は医学部の講義は、学生になにか訴えかけるものがないといけないとの考えの基に行ってきました。すなわち、教科書に書いてあるものをそのまま読んだり、どこかに書かれていたものをそのまま写してくるのではなく、自分が学んだことを噛み砕いて、知識は知識として伝授し、さらにその上に教える人の哲学や考え方を交えないと大学の講義とは言えないのではないかと考えています。一言で言えば研究で培った新しいものを作り出すクリエイティブな感覚が加わらないと大学の教育とは言えないというのが、私の哲学です。私は「創造的な研究、教育、診療活動」が行われていないところは大学の医学部とは呼べないのではないかと考えています。

では一体、創造性とはどのように発揮されてくるものなのでしょうか？これに対する答えを探しつづけたのが、この40年であると言っても過言ではありません。まだ私見の域を出ていませんが、「創造性という勘や天性のひらめきと考えがちではありますが、そうではなく、幅広い知識と見識、深い洞察、徹底した思索、こうした研究姿勢を貫き通す情熱と忍耐によって生み出されてくるようなもの」と考えています。すなわち、創造的な研究に欠くべからざる姿勢は、「常に体系を追求しつづける心」そのものであるように思います。この素晴らしい自然環境に恵まれた信州の風土はこの「体系を追求しつづける心」を持ち続けることのできる最良の条件を満たしていると言えましょう。さらにこうした思索を完結させるためには、自然環境と同時

に、自ら創造的な研究を推し進めている超一級の師との出会いという人的環境の存在も必要不可欠であることは言うまでもありません。すなわち、大学のもう一つの重要な使命は、こうした創造的研究を継承できる可能性を秘めた有為な人材を数多く社会に輩出することにあると思います。そのためには、知識と技術の伝授だけの教育では不十分であって、情熱をもって世界に冠たる独創的な研究に励み、その後ろ姿で無言の内に教える教育を失った場所は大学と呼ぶことはできないのではないのでしょうか。

では自分の40年の研究はその理念に照らし合わせて創造的なものであったのであろうか、謙虚に内省してみたいと思います。(1)医学部卒業時、将来の選択として「自分のしてみたい分野より、師を選んだというのが本音です」、それが恩師東 健彦先生でした。(2)その先生は、循環力学の理論的解析を行って、血管壁の壁周張力(岡・東の式)は部位によっては負になることもありうることを証明し、金字塔を打ち立てました。(3)私はその後姿より、医科学研究を意識して、四大疾患(炎症・腫瘍・循環障害・変性)のほとんどの初発部位である微小・リンパ循環の生理学を研究主題に選択しました。(4)研究手法に生理・薬理学的実験手法の他、電気生理学、光学・電子顕微鏡学、免疫組織化学、ラジオアイソトープを用いた実験法などさまざまな研究方法を活用してきました。その結果、①機能と形態とは表裏一体の関係であること、②生体機能はシーソーと同じく、遊びはあっても無駄のないこと、③生理学は体系化を目指し、法則性を見出す学問であり、それを徹底すれば研究のアイデアは無尽蔵にわき出ること、を悟りました。(5)解析手法がない時は、その装置を自ら作り出せばよいとの考えに至り、永年の共同研究者 坂口正雄長野高専名誉教授との知遇を得、イメージセンサを用いた種々な実験装置を作り出しました。(6)その延長線上に、発汗計の開発、医療機器認可、ベンチャー企業創出、研究成果活用兼業取締役の就任(本邦医学部の第一例目)、日本発汗学会の設立、理事長就任などのイノベーション活動を行ってきました。この一連の活動が認められ、科学技術振興機構(JST)の大学発ベンチャー支援事業のプ

プログラムオフィサーを10年以上に渡って務め、本邦の産学官連携のあり方の問題点を十二分に認識してきました。(7)地域においては、①ヘルシーライフ研究会(神澤陸雄会長)、ライフサイエンス研究会(望月朝人会長他)等の産学官コンソーシアム事業を立ち上げ、20年以上に渡ってその事業を運営してきました。②公益法人信州医学振興財団副理事長として、夜間健康講座を企画運営し、健康科学の科学的基盤、生理学を十二分に活用する方策を探してきました。(8)本務の仕事は、日本リンパ学会理事長として、自らの教室の研究を世界レベルに引き上げ、学会員に手本を示すと同時に、循環器病学、腫瘍学、免疫学をリンパ動態学という切り口で連結させ、新しいリンパ学の創生に専念してきました。こうした活動の評価として、リンパ学の Gordon Research Conference (Ventura, CA, USA) に、2004年と2008年招聘され講演を行うと共に、リンパ学の専門誌 Lymphatic Research and Biology の Asian Editor を創設以来続けてきました。また2012年には松本で第89回日本生理学会を大会長として開催しました。同時に本邦の中堅リンパ学研究者の質的向上を目指して、2年に一度、浅間温泉リンパカンファレンスを合宿形式で開催し、これを続けてき

ました。(9)これまでの医学教育、医科学研究活動で得た様々な経験、アイデア、人脈を活用して、プロモーション活動を主体とした新しいタイプの寄附講座「メディカル・ヘルスイノベーション講座」を(株)ブルボン、多摩川精機(株)、公益医療法人相澤病院、三者のご支援により2013年に設立し、今後はこの仕事に専念する予定でいます。

誠に、月日は百代の過客であり、40年の春秋は華胥の国に遊ぶのにも以て転瞬の間に過ぎ去りました。しかし、体験的な時間感覚はさておき、40年の歳月は決して短いものとは言えません。その間、自分が信州大学医学部器官制御生理学講座(旧第一生理学講座)のために、何をなし得たかを省みる時、自らの力量と努力の不足を痛感し、忸怩たるものを覚えます。今日まで大過なく教室を運営してこられたのは、偏に内外諸先輩・友人の有形無形の御支援と、教室の同僚諸子の誠実な協力と勉強の賜物であります。この場をお借りして、心からの謝意を表します。

☆

進 而 不 止 (東 竜太郎)

☆